

I G C 報告

浅海重夫

1. 国際地理学用語研究委員会（プレコングレス、C2）

この委員会は1968年のニューデリー I G C の時に設置されたもので、今回の東京大会には主査マイネン（西独）のほかツィーゼ（西独）が地形学の立場から「平坦面に関する用語の問題点」をレポートするために参加し、日本人は3名が出席した。

発表者とその内容は、マイネンの経過報告（前回モスクワ大会以降の）、上記ツィーゼの報告、および日本から浅海が、日本でこれまで独自にすすめていた文部省選定「学術用語集地理学編」の紹介。それらの詳細は雑誌「地理」の1980—7, pp. 165—167および、1981—1, pp. 67—69に記したので省略する。

このコミッションでマイネン主査が配布した6カ国語対照の地理学用語辞典を、本談話会発表における資料の1つとし、これについて若干の評価と批判を加えた。2400語におよぶ地理学術語に6カ国（英独仏西露伊）の委員が3～4年間で対応語の選定を行った努力、とくにイタリアは最後の半年余の期間に集録を完了したということはまず評価される。ただし今回配布のプリントはまだ試案の段階のものであり、マイネンも今後の修正を経て完成させるべきものと云っている。さてこの6カ国対応語リストに日本語を加えることが主査からも要望され、日本の委員として協力の姿勢をもつべき使命を感じずるが、上述の文部省選定案（英語と対照され、I G C 後1年余りを経た1981年末に日本学術振興会から出版）では語数も少く、6カ国語辞典の選定語とはかなり対応しない語が多いことがわかった。一方6カ国語辞典に集録されている語についても、果して地理学術語と認められるかどうか疑問ある語が意外に多く目につく。また無理にドイツ語の原用語を英語（又はフラン

ス語、…語）に訳出したと思われるものもある。学術用語とはその国の学界で現実に使われているものでなければならず、ある国では概念として存在しない他国の用語を、無理に訳出して対応させるのは無意味ではないかと思う。このような見解を添えてマイネン主査（現在イギリスのイェーツに交代）に回答したいと考えている。

2. 土壌地理学部会(S3B)

土壌地理学研究者の数は日本の地理学界では少いが、I G Uには生物地理学・土壌地理学のセッションがあって、ロンドン（1964）、ニューデリー（1968）、モンリオール（1972）、モスクワ（1976）のI G Cでは数名～20名の土壌地理学の発表があった。今回は13名の発表予定者がプログラムに組まれていたが、ソ連の2名、中国の1名などキャンセルがあって結局9名に減ってしまった。しかし日本人4名のほか5カ国からの外国人がそれぞれお国ぶりの片隣をのぞかせながら講演し、討論したこと、発表者のテーマが土壌の生成に関与する各因子（気候・植生・母材・地形・人間・時間）のうちのどれか1つ又は2つを取扱い、結局この全因子が誰かによって問題提起されるという多彩な内容もち、会議は僅か1日の開催ではあったが約40名の参加者を十分に楽しませるものがあった。

しかし討論の内容は必ずしも最高のレベルにあったとは云い難い。やはり言葉の障害による壁のほかに、研究の細部にわたると国ごとにあるいは学派ごとに見方や考察態度のちがいが出たということなのであろうか。とは云え国際学会はまず和やかに運ばれるのが望ましいことで、会の設営を担当した者として一応肩の荷をおろした思いである。

本稿は1981年1月31日、お茶の水地理談話会での発表要旨である。